

日本中世における市庭と広場

藤田裕嗣

はじめに

- 一 歴史地理学の研究史からの問題設定
- 二 市庭景観の諸類型と市舎

論文要旨

本研究では本共同研究の課題と問題点のうち「中世の市場を広場と把握できるか」との問題設定をまず受ける。日本中世史学では中世初期の市は広場で開かれたとする見解がある。このような市庭観を念頭に置きつつ、この問題設定に対して歴史地理学の立場から私見・見通しを提示するものである。

市庭に関する小林健太郎による歴史地理学研究の問題点として、戦国期の市屋敷・町屋敷から成る中心集落で市が開かれた場合の場所が問題にされていない点が指摘できる。これは、共同研究の課題との関わりでは、その場所は広場と認められるかという問題となる。

そして、市庭と広場との関係を考えるのに、まず日本中世史学で既に広場として指摘されている中世初期の市庭から、歴史地理学で問題とされてきた戦国期の市屋敷・町屋敷に至るまでの間の形態について、「市庭景観の諸類型

- 三 絵画史料との対話
 - 四 市庭と広場
- おわりに

と理念的变化系列」というモデル図(図1)を用いて説明した。そのうち、中世初期と戦国期との間でキーワードとなる市舎について文書史料での出現形態を問題にした。このような文書史料に比べて、市の景観を説明するのにより有効性をもつ絵画史料を次に検討した。その上で「市庭景観の諸類型と理念的变化系列」のモデル図(図1)をもとに平面図に展開した図(図4)を提示し、広場との関わりに関する私見を主に説明した。

結論としては、今回の問題に対する試案として、町場へと発展し、町並が形成される段階に至っても、町屋の軒先を借りるという形で市が開かれることによつて、町屋がとりつく道の一部が市庭として認定されたものではなかったか、その部分が広場とも見なせよう、ということになる。

はじめに

本共同研究「都市に於ける交流空間の史的研究―広場」の開始にあたって、福田アジオ研究代表者は「①空間としての広場」という項目の下にいくつかの課題と問題点を提示された。⁽¹⁾ そのうち本稿では「中世の市場を広場と把握できるか」との問題設定を受け、日本中世について若干の検討を加える。

この「広場」を筆者は歴史地理学の立場から捉える。すなわち、地理学の基本的概念である景觀の視点を前稿に引き続き重視することとする。このように、本稿では「広場」との関わりに引きつけて景觀の面から日本中世の市場を考察する。

日本中世の市場に関して、文献史学では不定期市がやがて定期市となり、市の開かれる回数が増して町場化し、ついに都市へとなる、とするのが一般的理解であり、このような歴史的流れの中で初期段階の市は広場で開かれたのであるとの考えがあることに、まずは注目しておく必要がある。⁽³⁾ 一方で、現代の市場を考えてみても、例えば石川県輪島市住吉神社の夕市のように、神社の境内といった明らかな広場で開かれる市がある。⁽⁴⁾ さらにその他に、町並を形成する家屋の前の道路で開かれる場合も、例えば越後地方などで見られる。⁽⁵⁾ 後者は普段は自動車も通行する道路であり、市場となるのは、一定の時間内だけである。これを広場と認識できるか、といった現代にも通じる問題を考えることにもつながる

う。但し、市場として機能する時間が限られている、という点は市場の本質的な性格であり、何もこれを特別視する必要はないようにも思われる。歩行者天国も本来は道路であり、同様な性格を持つのである。

中世初期から一挙に現代まで論点が飛んだが、その間の長い歴史的過程はどのように捉えられるのであろうか。この問題設定に対して本稿では中世に焦点を絞り、文献史学における上述の研究史を念頭に置きつつ、歴史地理学の立場から若干の私見・見通しを提示したい。

市場と広場は、どちらも「場」が付き、叙述する上では都合がよいのではあるが、市場は「しじょう」と紛らわしいので、前稿に引き続き以下、「市庭」と統一して表記することを最初に断っておきたい。

一 歴史地理学の研究史からの問題設定

議論を開始するにあたって、筆者が拠って立つところの歴史地理学における研究史上の問題のありかをまず踏まえることとする。

中世の市庭と広場に関して歴史地理学の立場から精力的に行ってきたのは小林健太郎であった。⁽⁶⁾

小林は地方的中心集落網形成に関する一連の研究のなかで中世初期から戦国期の市庭の景觀を問題にしている。研究の主なフィールドは、史料の点で比較的恵まれた尾張平野と萩藩領、および大閤検地の成果である「長宗我部地検帳」が一国にわたって残されている土佐国である。研究方法としては、今日に残された地籍図を主に用いて近代初頭の地名と

土地割を確認し、現地比定を行った上で、史料に見える景観と突き合わせることによって当時の景観を復原する。そして、この復原された景観を重視して考察を進めている。

以上のような研究方法によつて導かれた結論は次のように略述できよう。すなわち、初期の村落市庭が開かれた所においても、その地割は不規則なブロック状（奥行に比べ間口が広い）を呈して、規模も一般村落に同じである。そこで、その市庭も今日まで遺構を留めるような顕著な施設を伴わない。そして、十六世紀中期には村落市庭と城館が結合して、中心集落網が形成される。それにも、奥行に比べて間口が狭いような、短冊型地割を特色とする町並の形成がみられるものと、村落的傾向が強く、市庭商業を主とするものがあるという。

さらに、戦国期の土佐については「長宗我部地検帳」から確認される景観が一筆レベルという精緻さで復原される。すなわち、そこに見える市屋敷・町屋敷から成る中心集落の景観をまず問題にしている。その上で、復原された市町における市屋敷・町屋敷の数とその旧地に残る土地割の形態をもとに市町の経済的中心機能レベルの高低を推定する。具体的には、ブロック型地割が卓越しておれば市庭商業に比重がある傾向をもち、その逆に、短冊型地割を呈していれば店舗商業が優位を占める傾向があつて、後者の市町の経済的中心機能レベルは、前者より高いとしている。つまり、市町の中心機能すら景観から推定されているのである。本稿でとくに問題とする広場との関係で注目される指摘は、初期の村落市場において市が開かれた場の候補として幅の広い道路を挙げている

点である。⁽⁷⁾

この研究に対して指摘できる問題点としては、第一に、推定の指標とされている市屋敷・町屋敷の住人による商業機能の実態が、不問に付されていることを挙げられよう。この点は既に機会がある毎に指摘し、⁽⁸⁾前稿でも市屋敷・町屋敷の住人による商業機能を歴史的経過の中で若干検討した。しかし、住人すべてが商人ではないし、この市町の商業機能は市町以外に住んでいた市庭商人などによつても分担されていた可能性があるという不十分な考察に留まった。市町の住人による商業機能の実態やそこにおける市の形態などによる商業機能に対する住人の役割といった具体相は明確にし得ない点が多いのである。

このように、史料に現れる「市」の実態究明は困難を極めるのであるが、その理由の一つとして、地名としての「市」「市場」の問題が横たわっていると言える。すなわち、市の形態による商業が払拭され、店舗商業の段階に至った後にも史料に「市」「市場」の名が出現することも考えられるのであつて、史料にそのような地名が見えても、当時既に実際は市が開かれていない可能性もあり、市庭商業と直ちに結び付けることはできないのである。⁽⁹⁾

これは逆に、地名に「町」と付く場所でも市庭商業が営まれている場合も考えられることにつながる。

例えば、小林が検討した「長宗我部地検帳」に見える各市町における「市ヤシキ」「町ヤシキ」や地名の記載に注目して若干整理してみると、⁽¹⁰⁾史料自体の中で以下のような混乱がある。すなわち、小林によつて戦国

大名級の城下市町と評価された中村では「従是市屋敷」とありながら一筆目のホノキ名の項には「町ヤシキ立町東町」と見えるというように、史料の中でも市ヤシキと町ヤシキとの混乱が認められる。さらに、高岡では「高岡市ヤシキ南ノ丁」などとあり、岡豊でも「新町市ヤシキ」と見える。また、小林が国人領主級の城下市町とする弘岡では「市屋敷東ノ町」などとある。⁽¹⁾これらは地名としての町(丁)と「市ヤシキ」とが併記されている。小林の復原によれば市ヤシキは短冊型地割を呈しており、多数が並んで中心集落を形成しているが、地名としては「町」と付いているのである。「市ヤシキ」とあるからといって直ちに市が開かれた証左ともできないであろうが、その可能性は考えておかなくてはなるまい。しかし、小林はその場所を問題にする視点は持ち合わせていない。

このようにして、市屋敷・町屋敷から成る中心集落で市が開かれた場合の場所は、問題にされないのが第二の問題点である。これを受けて本稿ではこの問題点の解明を目指したい。さきほど指摘したように、中世史研究において中世初期の市が広場で開かれたとする見解があるが、歴史地理学の研究史からは戦国期の市屋敷・町屋敷から成る中心集落における開市の場が問題となるわけである。今回の問題設定との関係ではへその場所は広場と認められるか²という問題を考察することになる。さらに、それが広場と認められるにせよ、認められないにせよ、中世初期から戦国期に至るまでの市庭と広場との関わりも問題にされねばならない。

一一 市庭景観の諸類型と市舎

景観の視点を重視しつつ市庭を広場との関係から考察するのに、中世初期から戦国期までの過程に光を当てる必要が生じてきた。これについて、前稿では「市庭景観の諸類型と理念的発展系列」のモデル図を提示した。このモデル図には不十分な点も認められるので、これに若干補筆した⁽¹²⁾図1を用いて、考察を深めたい。

まず類型の一つ目は、何もない広場で市が開かれた場合であり、広場との関わりを重視する本稿で何よりも注目される類型である。そして、二行目以下は何らかの施設を伴う。すなわち、二行目から四行目までが、専ら市を開くために用いられる施設・建物が設置された場合である。これを前稿同様に統一的に市舎と表現することにする。最後の類型は、市を開くためではなく、当初から定住するための建築物が市庭に設置された場合である。このそれぞれを今回は記号で表し、何もない広場の場合をA、市舎が設置されている場合をB、当初から定住するための建築物が設置された場合をCとする。

そして、市舎が果たす機能でBをさらに細分した。①は市舎が、その下で開市されるための施設という本来の機能を発揮している場合であり、②は市舎などが自然発生的に住居として利用されている場合である。B②ではCと同様に、市庭に定住者が現れており、Cとの区別が問題となるが、ここでBは、自然発生的に定住者が現れるのに対し、Cは定住す

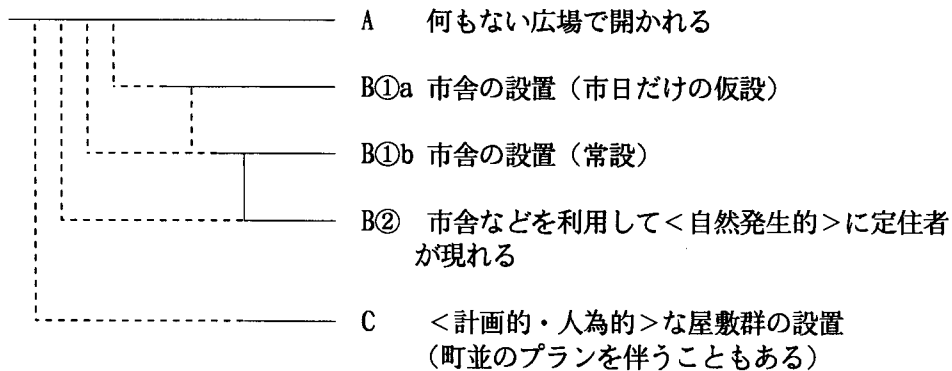


図1 市庭景観の諸類型と理念的变化系列

* 個々の市庭の具体例ではそれぞれの類型のいくつかが地理的に分化し、併存していたこともありうる。

るための建築物が計画的・人為的に設置されるという点で区別される。計画的・人為的な設置を行う主体としては領主がまず考えられる。そこで、Cにあたる市庭では商人側よりも領主側の意向が強く働いている場合が多いであろう。典型的には町並みのプランを伴う。但し、個々の具体例についてBかCかの区別を史料に基づいて判断することは難しく、あくまで理念的に考えてのことである。

さらに市舎の設置のされ方でB①をa仮設の市舎、b常設の市舎とに細分した。

以上のように市庭の景観として5類型を考えた場合、歴史的過程の大きな流れとしては家屋が一軒もないタイプAから、家屋が立ち並ぶタイプCに至るまで、図1に示した順に現れたとするのが常識的であろう。

但し、個々の具体例を考えると、そう単純にはいかない。既に前稿で指摘したことであるが、例えば備中国新見荘の市庭では「市庭在家」という定住者が現れている一方で、紺屋が来訪する「紺借屋」も見られた。

先の5類型にあてはめると、「市庭在家」はタイプB②またはタイプC、「紺借屋」はタイプB①bにあたると思われる。このように、「個々の市庭の具体例ではそれぞれの類型のいくつかが地理的に分化し、併存していたこともありうる」のである。この点は、重要な留意点であり、本稿でもモデル図の注の形で併記した。⁽¹⁴⁾ さらに歴史上のある一時点をとって見たとき、複数の市庭間でもいくつかの類型が併存していたことも考えられる。⁽¹⁵⁾ すなわち、この5類型は、時代を経るにつれてタイプAからタイプCへと直線的に「発展」するという性質のものでは決していないの

である。⁽¹⁶⁾

このような留意点を念頭に置きつつ、時代を通じての変化系列について図 1 では破線や実線を用いて示した。

例えば、まずタイプ B ① a について言うと、何もない広場で開かれていた市庭で市日のたびごとに仮設の市舎が設置されるようになった場合もあったと考えられ、タイプ A と破線で結んだ。或いは市がまったく開かれていなかった場所に市舎が仮設され、そこが新たに市庭と認定される場合もあったと思われる。それが実線の意味である。さらにタイプ B ① b の場合も同様に考えられるので、実線もあり、タイプ A とも破線で結んでいる。それとは別に右側に a から b へと破線で結んでるのは、仮設の市舎だったのが常設へと変化する場合を想定してのことである。

また、タイプ B ② については計画的ではなく自然発生的に定住者が現れる場合を想定しているので、タイプ B ① との関係では常設化した市舎を家屋として利用する b の類型からの進展しか考えられないことになる。それを意味するのがタイプ B ① b と結ばれた実線である。ないしは市舎の仮設すら見られなかった市庭に定住しようとする者自身が家屋を建設するという場合もありうる。すなわち、タイプ A の広場からの変化であり、これがタイプ A と結ばれた破線である。この二つの場合しかないと考えられよう。但し、このうちタイプ C と近くなるのは後者の場合であり、さきにも確認したように、定住者自身が家屋を建設する人為的な定住ではあるが計画的なプランは伴わないという点でタイプ C と区別されることになる。

タイプ C については、例えば、タイプ B ① a の市庭から変化したことも想定できようが、その場合は以前の市庭の性格を全否定した新しい市庭の建設と考えて、敢えて破線では結ばないこととした。

ところで、戦国期から近世への移行期における市や都市について最近注目すべき論者を次々に発表している桜井英治は、市庭を「景觀」から次のように分類している。すなわち、「A. 普段は何もない空地で、市日だけ市小屋が立てられ、商売が行われる。B. 商売は市日にだけ行われるが、普段から市小屋は立っている。C. B の市小屋の周囲に常設の店舗が立ち並び、町場化している」という三つである。⁽¹⁷⁾ 筆者の先の類型区分でも同じように A から C のアルファベットを用いたため混乱を招きやすいが、桜井の言う A 型は筆者のタイプ B ① a にあたり、桜井の B 型は筆者のタイプ B ① b に対応している。さらに、桜井は C 型として B 型の周囲に常設の店舗が見られる場合を挙げている。これに対し、筆者の類型は、あくまで中世における市庭の類型であり、常設店舗との関係は重視していない。より正確に言えば、史料上「市ヤシキ」「町ヤシキ」とあるだけで常設店舗とは認定できないにも関わらず、「中心集落」との表現のために常設店舗が立ち並びイメージを与えがちな研究史を念頭に置き、常設店舗との関係を敢えて断ち切ったのである。さきにも確認したように、「市ヤシキ」「町ヤシキ」の住人がすべて商人であるわけではなく、店舗を営んでいることは可能性の一つに過ぎないと考えられる。これに対し、桜井が常設店舗の出現する場合を別のタイプとしてことさらに分類したのは、近世の実態を念頭に置いているためと思われる。この点を承

知の上で、筆者の類型で敢えて言い換えるなら、タイプB①bの周囲にタイプB②またはタイプCの市庭とが併存している場合とできよう。

本稿でとくに問題とする広場との関係では中世初期の市庭は筆者の言うタイプAの状態が少なくないと考えられるが、一方で、歴史地理学が解明してきた戦国期はタイプB②またはタイプCへと変化した市庭も数多く見られたと思われる。このタイプにおける市庭でとくに広場との関係で市が開かれた場所を問題にするのであり、そこに至るまでの歴史的過程も考察する必要がある。これを検討するにあたってキーワードとなるのは、タイプB段階の市庭に設置される市舎である。そこで、検討の手始めに市舎が史料に出現する形態を見ていくことにしよう。

前稿でも指摘したように、貞応二(一二二二)年藏人所牒案に「檢物交易」で摂津国「美六市」などについて「諸国散在□等打屋形、垂交易」とある。これについて保立道久は「屋形を打つ」ことが市庭の仮屋の仮設を意味していたことは明らかであろう」と述べている。⁽¹⁹⁾

この場合は紙背文書であるために多くの文字が欠損していることもあって、打つ行為を行っている主体が今一つ判然としないが、次の史料ではややはっきりする。すなわち、高橋康夫も注目する文明一八(一四八六)年の大和国「矢木市ニ毎日市ヲ可立之由」「津料可取之用云々、数百間ノ屋形打之云々」との「大乘院寺社雜事記」の記事では、屋形を打つ主体は恐らく領主としての越智禪正・岸田である。⁽²⁰⁾

このように、いずれも「屋形を打つ」との表現がなされている。京都といった典型的な中世都市の内部や地方の市庭も含めて検討した高橋康

夫は、建築に近い屋形を営むことが「打つ」と表現されている点に臨時的・仮設的な性格が浮き彫りにされていると見ている。さきほどの保立道久と同様の見解と言えよう。さらに、高橋はこのような性格を持つ施設であることが「市に営まれた建物あるいは売買に用いられた建物にみられる最大の特徴」であると積極的に評価されている。⁽²²⁾ また、桜井英治も一七世紀の史料に見える「見世打ち」とは定期市の市日を前に市小屋を仮設する作業であると考えている。⁽²³⁾ タイプB①aの市舎を仮設する行為が史料では「打つ」と表現されていることに注目しておきたい。

市舎を「在家」と表現している場合もある。「一遍上人絵伝」伴野市の部分を説明する詞書における「其年、信濃国佐久郡伴野の市庭の在家にして」との一節がそれである。前稿でも指摘したように、⁽²⁴⁾ 備前国福岡市の場合も含めて考えると、この市舎はaの仮設ではなく、bの常設だったと言える。

「かりや」との表現も見られる。備中国新見荘の「紺借屋」や摂津国天王寺浜市の「酒借屋」については前稿で史料を挙げておいたが、⁽²⁵⁾ 他にも紀行文「廻国雜記」に文明一八(一四八六)年に武蔵国「ひざをり(膝折)」といへる里に市侍り。暫くかりやに休みて、例の俳諧を詠じて、同行に語り侍る、

商人はいかで立つらむ膝折の市に脚氣をうるにぞありける⁽²⁶⁾

と見える。作者道興准後は膝折の「市」にあった「かりや」で休息しているが、「市」は単に市庭の意味でそのとき市は開かれていなかったとも、実際に開かれていたともどちらにも解釈可能なので、この場合市舎

が常設か仮設か判断できない。さらに、年は未詳であるが、鎌倉期の文書に「この月のひんこ(備後)のふかつのいち(深津市)へ、人を給候て」「ふかつのいち(深津市)にては、た□つのあまこせん(尼御前)のかりやへ人を給候べく候」とある。⁽²⁷⁾「この月の」という表現から深津市は月一度の定期市と考えられるが、この場合の市舎も両様の可能性がある。但し、市舎を占有する者が定まっており、しかも深津の住人ではなく、た□つに住む商人であることは注目される。すなわち、この市庭の商業機能が他所に住む商人によって分担されていたことが明らかにできる数少ない史料となっている。⁽²⁸⁾

以上紹介してきた文書史料でも市舎が建てられた位置を広場との関係から明確にすることはできない。このような市庭の景観を考える上で有効性を持ちうる史料は、絵画史料である。次章で取り上げよう。

三 絵画史料との対話

前章で検討した文書史料からは市庭の景観の解明が難しいことを受けて、景観を考える上でより有効性を持つ絵画史料を本章では検討する。

まず、前稿でも注目した「一遍上人絵伝」⁽²⁹⁾に見える備前国福岡市の場面を取り上げよう。福岡市では掘建て小屋の下に多様な物品が並べられており、実際に市が開かれていたときを描いていると考えられるのに対し、同じ「一遍上人絵伝」に見える信濃国伴野市では同種の掘建て小屋が乞食などの活動の場と化している。このように市が開かれていないと

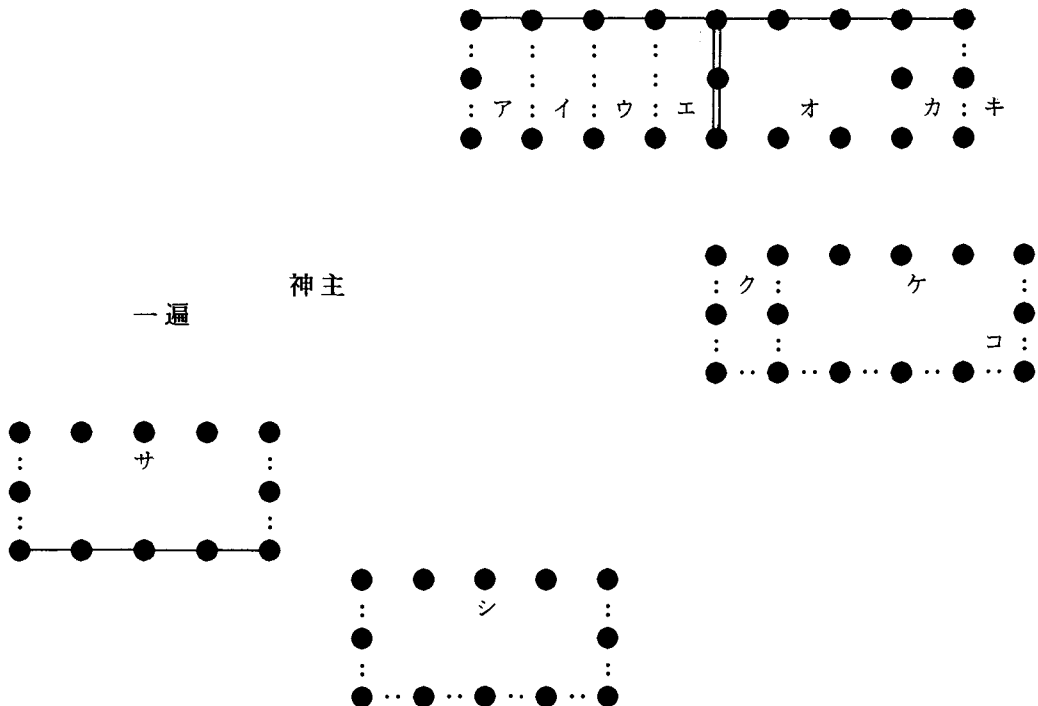


図2 『一遍上人絵伝』福岡市の場面の平面図

●は柱、一は境を仕切るための覆い、..は覆いはないが、境と見なされる箇所
||は市舎が隣接しているが、右と左とで明らかに異なる屋根が繋がれている箇所

きでも掘建て小屋、すなわち市舎は撤収されておらず、さきの類型ではタイプB①bにあたると思われるのであった。

このような市舎が建つ備前国福岡市の場面について、広場との関係の問題にする本稿では検討の便をはかるために「一遍上人絵伝」に見える情景をまずは平面図に移し換えてみたい。これが図2である。この図で●は柱、―は板などによる境の仕切を表している。実際に仕切は描かれていないが、境と見なされる場合は：の形で示した。画面の上方に見られる市舎は、屋根が左右で異なる。すなわち、向かって右側は草葺きであるのに対し、左側は板葺きである。その接続部は柱を共有しているように、板で仕切っている。図ではその仕切をⅡで表した。この接続部などは「一遍上人絵伝」に明確に描かれているが、一般に絵巻物では画面の左上方から俯瞰した形で描かれるために、右側の奥は屋根などに隠されてしまう。とくに手前左端の市舎は、画面の手前側に仕切が描かれており、市舎の下における柱の立ち方は不明である。このような場合は推測を含めて示さざるを得なかった。扱われている商品種も特定できない。その他の市舎ではエで布、オで米、カで鳥、キで魚が扱われている。エでは尼が布を見ており、その左隣では市女笠姿の女性が布を持ち、銭束を握る男性と相対している。キの右隣では天秤棒の両端に数尾の魚をぶら下げて右方向に歩く人が描かれている。すなわち、福岡市から別の場所へ魚を運んでいる。豊かな市の描写である。アは下駄、クでは面が並べられているのであろうか。シとコは大甕である。このうちシでは明らかに倒されていて、この大甕自体が商品であった可能性が高い。他の

市舎に比べて柱の高さが低いことも注目してよからう。これに対し、コでは立てられており、大甕の中に入れられた例えば酒や油が商品であるのかもしれない。⁽³⁰⁾

ア・エが市舎の間ずっと宛てがわれているのに対し、オの米商人が三間分を占拠していることは、市庭商業における米の重要性を示唆するものとして注目されよう。

イの前に立つ市女笠姿の女性の手前が広い空閑地となっており、一遍や彼を切り付けようとしている吉備津宮の神主の一行たちが描かれている。逆に、一遍と神主一行という主題をここに配置したために、広い空閑地として描かれる結果となったと言うべきかもしれない。とはいえ、福岡市に集まる人たちに対し一遍はここで辻説法を行っていたわけ、この部分は明らかに広場と見なされよう。このような広場との関わりについての詳細は、次章で検討することとしたい。

次の事例は「豊前小山田社放生殿市場図」⁽³¹⁾にみえる市庭である。この図は事書に「八幡宇佐宮 和間浜放生会之時法用場粧殿同仮屋形之事」とある応永二〇（一四一三）年の注文に付属するもので、文書の本文中では例えば「一国司屋八間」^{六尺間}、自宮司幄一丈貳尺東退、北子午立之」などとあって、和間浜放生会の時に飾り付ける荘厳とともに仮設される建物等の位置・大きさなどを記している。市に関係すると思われる記載は注文自体には見えないが、図では「市場東頭也」との大書も伴っており、「牛馬市」とも見え、市庭を示していることが明らかである。この市庭付近の情景を図2にならって平面図に移し換え、図3を作成した。

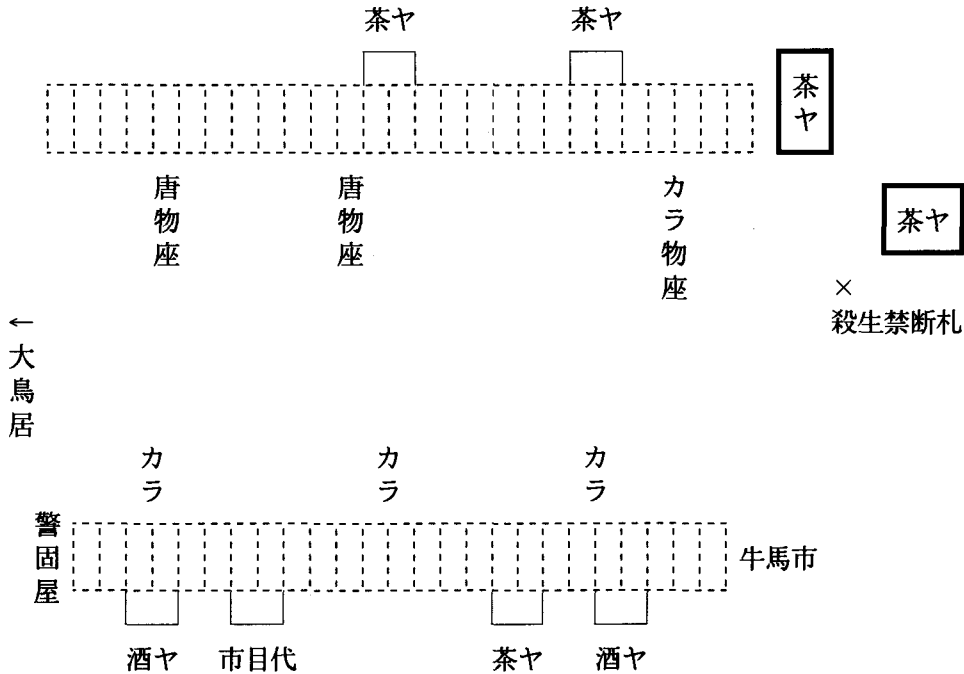


図 3 豊前国小山田社放生殿市庭図に見える市庭付近の平面図

この図では大鳥居の東方に「市場東頭也」と大書された部分があり、これに面して両側に二〇間以上もある長い掘建て小屋様の図像がまぎれ立つ。中軸線の東端に描かれた浮殿方面から大鳥居を出た場所にあたっており、中軸線の道路を挟んで建てられた市舎なのであろう。浮殿については柱間を描いた差図とも言うべき平面図も付されているが、市舎は道路からみた正面図の形で描かれているので、側面の間数などは不明である。そこで、柱をも示した図 2 とは別の要領で図を作成した。

図 3 に示したように、「唐物座」「カラ」との注記がそれぞれ三ヶ所に施されている。そして、このような長い掘建て小屋様の図像とは別に、道路からみて奥の六ヶ所に屋根状の図像が描かれ、「市目代」の他、三ヶ所には「茶ヤ」、残り二ヶ所は「酒ヤ」との文字注記を伴っている。これら掘建て小屋が道路を挟んで並ぶ部分の東に接して、「牛馬市」と記され、「殺生禁断札」も立っている。そして、その付近に「茶ヤ」の建物が二ヶ所にある。この建物は、妻の側が二間あることも描かれており、他の建物に比べて描き方は明らかに丁寧である。これらのことから、長い掘建て小屋様の図像は和間浜放生会の際の臨時市に伴って建てられるもので、注文の事書にある「仮屋形」との表現にあたり、先の類型で言えば、タイプ B ① a 仮設の市舎と思われる。そして、それと区別された「茶ヤ」などの建物は、常設化した市舎 (b) または店舗とも考えられる。図 3 では前者は破線、後者は実線で示してある。なお、モデル図 1 に「個々の市庭の具体例ではそれぞれの種類のいくつかが地理的に分化し、併存していたこともありうる」と注記したのは、このような事例を念頭に置

いているのである⁽³²⁾。

この市庭の場合、掘建て小屋に挟まれ、「市場東頭也」と大書された部分の道路、およびそれに東接する牛馬市の部分は広場と見なしてよいと思われる。なお、大鳥居の南、市庭のすぐ西に隣接して「警固屋」がある。さきに見た「殺生禁断札」とともに市庭を挟む地点に位置し、市庭の平和が目指されていたと考えられることも注目に値しよう。

第三の事例として「備前国西大寺境内市場図」にみえる西大寺市庭を取り上げる。この図の作成年代については元享二〇三（一三二二）三〇年頃とする説と中世後期とする説とがあつて問題を残すが、ここではその問題には立ち入らない。いずれにしても、図には数ヶ所の書き入れ⁽³⁴⁾があり、その一部で「定西大寺市公事国方地頭方事」との事書のあとに市公事等の記載がある点が、本稿との関係では注目される。

そこでは事書のすぐあとに「酒屋御公事一年一家別百文宛、市日ハ一家別酒二升宛地頭方事、魚座ハ一年三百文、船儀別百文宛」などあつて、市公事の賦課に「一年一家別」という家別方式と座別の方式の二つの方式があつたことがわかる。前者の方式は引用部分の酒屋の他に、「餅屋」にも適用されている。同じ一年で百文である。後者の方式は魚座の他に、具体的には庭座⁽³⁵⁾と鑄物座とが挙げられている。「其外皆一座一年百文宛」とも記されていて、残念ながらこれ以外は取扱商品が判明しない。座とは市の販売座席、いわゆる市座のことと考えられる。他の座と同様、庭座が百文である以外は魚座は三百文、鑄物座は二百文となっていて、特別に高額なためにことさら書き出されたのである。

一方、酒屋については「市日ハ一家別酒二升宛地頭方事」とあつて市日についての追加徴収も行われているから、市日以外にも商売を行っていたと考えられる。常設の店舗と考えてよからう。⁽³⁶⁾すなわち、西大寺市庭では市座のような市庭商業と店舗商業とが併存していたのである。モデル図1の注に言う併存の例の一つである。

本稿との関わりではこの併存のあり方が上記「境内市場図」に描写されていることが期待されるが、この図には三重塔や鐘楼など堂舎の類の建物が並んでいるだけで、残念ながら具体的な図像を認められない。但し、図のほぼ中央に「堂敷五段内、市庭敷二段、是高除也」との文字注記があることが注意され、図の中で「市庭敷」を描写していることを意味する可能性は捨てきれない。この文字注記を挟む形で一間×三間、一間×六間の簡単な造りと見られる建物が立っている。これが市舎であつて、この付近が「市庭敷」として把握されていたということかもしれない。市庭敷に関しては、欄外にも「五代ハ市庭敷領家方、五代ハ地頭方市庭敷、一段内、十代地頭方市庭敷、廿五代地頭方市庭敷」との書き入れがある。

四 市庭と広場

本章ではいよいよ中世の市庭と広場との関わりという、本稿での中心課題に迫る。

前章での平面図による考察を踏まえ、図1の「市庭景観の諸類型と理

念的変化系列」のモデル図で示された類型毎に広場との関わりを中心に考察することとしたい。そこで、とくに図3の要領に合わせて図1を平面図に置き換えた図4を作成し、これについて説明を加えていく。

その前に「広場」の定義として、「景觀」の上で空閑地であるという以外に、誰もが利用できるという性格を合わせて持つ、ととりあえず考えておくことにする。

図4を参照してもらいたい。

タイプAの市庭では普段は何もない広場で市が開かれているのであるから、市が開かれている時間帯以外は全体が広場と認められる。市とだけ仮設の市舎がその都度「打」たれるタイプB①aでも同様である。市が開かれているときも、市庭に参集する商人たちが商品を並べている部分そのもの以外は広場と見なしても差し支えないであろう。そこで、図では広場を表す薄いアミを全体にかぶせた。

次にタイプB①bについて福岡市の場合を考えてみよう。一遍や彼を切りつけようとしている神主の一行とその情景を見守る群集、品定め之余念のない人たちは市舎で取り囲まれている部分にいる。この部分が広場と言えよう。このように市が開かれている時間帯においては常設の市舎が立つ部分は広場とみなし難い。

一方で、市が開かれている時間帯から外れた伴野市の場合、市舎の下で一遍の一行が瑞雲を眺め、乞食も座っている。すなわち、乞食などにとって格好の活動の場となっているわけで、市舎の部分も広場と見なせないこともない。その点では市が開かれていない時間帯に限ると、その

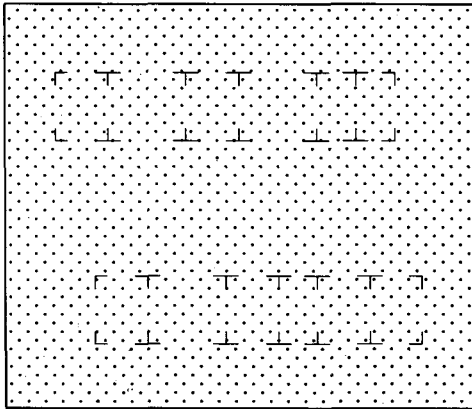
都度施設が撤去されるaまでの市庭と、広場の範囲は変わらないことになる。図ではタイプAやタイプB①aの市庭と同様にアミを全体にかけ、市舎を示す部分だけ実線にすることで区別して示してある。

タイプB②に至ると、市舎には定住者が住むようになる。図4では一軒一軒を太い実線で表した。そのために市舎を利用した家屋が立つ部分は立ち入りが制限されるわけで、広場と認定できないことは明らかである。また、前稿で若干検討を加えた備中国新見荘の史料では「市庭在家」の「後地」が屋敷と一体に把握されている。屋敷に付随する部分と認定されたのであろう。一方、「後地」とは逆方向にあたる屋敷の前面は、道路である。家屋列に挟まれた道路の部分は広場と言える。Yのような家屋が立っていない部分も広場と見なせよう。図4で示したように、先ほどのタイプの比べると、広場の範囲は縮小しているのである。

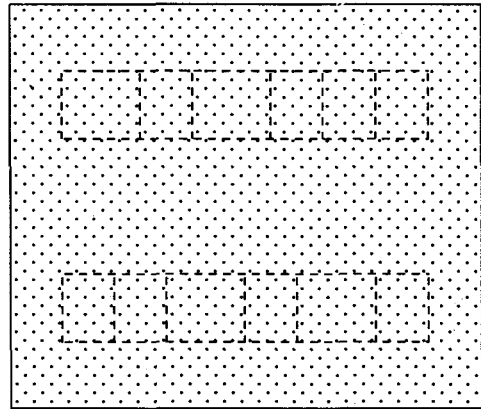
このうち市庭として市が開かれうる最大の範囲を次に考察しよう。前稿で指摘したように、⁽³⁷⁾仮説として家屋の軒先を借りて市が開かれることが考えられるわけで、この仮説に従って家屋の軒先が広がる部分は市庭になりうるとして濃いアミをかけることとした。

それ以外にも図でXとした場所は両側に家屋が立っていない、道路の延長部分である。家屋の軒先を借りるだけではなく、このように延長部分でも市が開かれた可能性はあろう。また、家屋が立つ隣の空き地で市が開かれる可能性も考えられる。⁽³⁸⁾これにYの記号を与えた。このように、タイプB②に至った場合でもさきほど広場と見なした部分だけに限定して考えると、その範囲内がタイプAの市庭であると言ってもよからう。

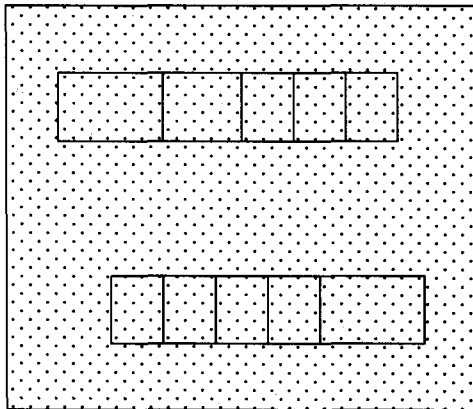
タイプA 何もない広場



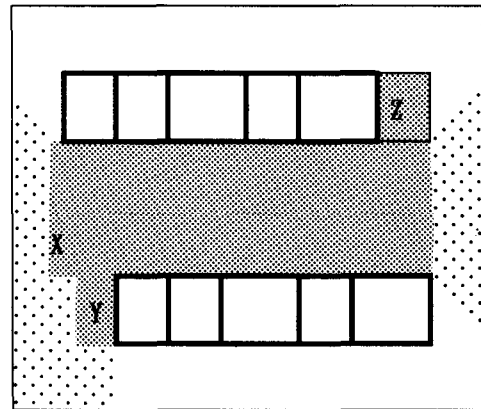
タイプB①a 市舎の設置（仮設）



タイプB①b 市舎の設置（常設）

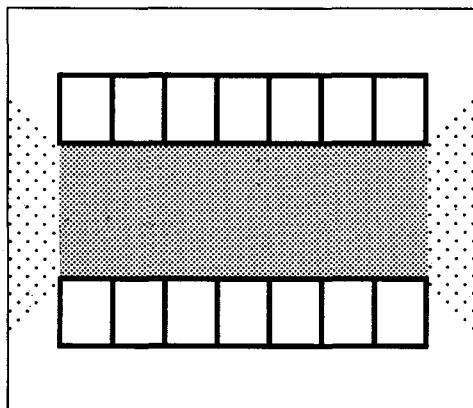


タイプB② 定住者の出現



※XやYでタイプAまたはB①a、ZでタイプB①bの市庭が併存している場合

タイプC 屋敷群の設置



※町並のプランを伴う典型例の場合

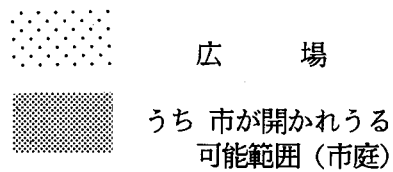


図4 市庭景観の諸類型と広場

或いは、市日のときだけ家屋の前に市舎が仮設される場合も考えられ、その場合は広場の範囲内にタイプ B ① a の市庭が現れている状態とも見なせよう。いずれにせよ、タイプ B ① b に比べると市庭の範囲も縮小している。

既に前稿で指摘したことであるが、新見荘の史料では「後地」を付随させた「屋敷」に住む「市庭在家」という定住者以外に、「紺借屋并座役錢」について「但依商人多少毎年年用途足不同也」と注記があるように、

「紺借屋」などを利用して商売する「商人」が、年によって一定していなかった。さらに「座役錢」とは、市庭における販売座席、いわゆる市座との関連が考えられる。彼ら「商人」は、恐らくここに定住する「市庭在家」ではなく、他所からやつて来たと思われる。「市庭在家」はタイプ B ② またはタイプ C にあたるのに対し、恐らく「紺借屋」はタイプ B ① b、「座役錢」に関わるのはタイプ A の市庭である可能性があり、新見荘の市庭ではそれぞれの類型の市庭が併存していたと考えられるのであった。

図 4 でタイプ B ② について太い実線で示された定住者の住む家屋が並ぶ中で一軒のみタイプ B ① b の市舎と同様の細い実線で表した(乙)。この市舎は、さきの新見荘の史料で言えば、「紺借屋」を表そうとしたものである。そして、さきほど指摘したように、家屋の軒先や X、Y のような場所がタイプ A の市庭と見なされる。

最後に、タイプ C の市庭を検討する。図 4 では町並みのプランを伴う典型例の場合を想定し、全ての家屋が同一のプランで並んでいる様を示

してある。タイプ C の市庭ではプランを策定したプランナー側、例えば領主層の権限が増大していると考えられるが、図 4 のような図に反映される限りでは家屋が統一され、Y のようにプランから外れる場所が考えにくい点以外は、タイプ B ② の市庭とさほど変わらないと思われる。

おわりに

本稿では今回の問題設定との関係で「市屋敷・町屋敷から成る中心集落で市が開かれた場合の場所は広場と認められるか」という問題に対する試案を提示した。結論としては、町場へと発展し、町並が形成される段階に至っても、町屋の軒先を借りるという形で市が開かれることによつて、市庭として認定されたのが町屋のとりつく道の一部であり、それを広場と認識できると考えられよう。⁽⁴⁰⁾

冒頭で説明したように、日本中世の中心集落に関する歴史地理学研究では、従来景観の視点が重視され、小林はその中心機能ですら景観から推定していた。このような研究動向に対し、筆者はこれまで市町の中心機能に直接アプローチするために、いったん景観の問題は捨象して、商人による商品流通そのものに着目し、流通システムなどに若干の検討を重ねてきた。その際は、市庭を自らの商業の重要な拠点とするような、市庭商業に従事する市庭商人の活動に特に留意した。⁽⁴¹⁾ 小林の研究視角ではどちらかと言えば市庭の定住者にスポットが当てられ、このような市庭商人の来集も中心集落の商業機能に貢献していることへの顧慮が不十

分な点を念頭に置いてのことである。しかし、筆者の流通システム論も、小林の形態論と議論が噛み合うほど深まっていはいない。⁽⁴²⁾

筆者の流通システム論と形態論との接点を引き続き求める点が今後の研究課題としてまず挙げられよう。⁽⁴³⁾さらに、町屋の集合体としての町場と市が開かれる場としての市庭との空間的峻別が必要であり、さらに検討を進めることも研究課題として指摘し、ひとまず稿を終えたい。

註

- (1) その概容は本研究報告に掲載された記録に示されている。
- (2) 拙稿「市庭と都市のあいだー地理学からの研究視角ー」(中世都市研究会編『都市空間ー中世都市研究1』新人物往来社、一九九四年)。以下、「前稿」とは本研究を指す。前稿は、本共同研究で一九九〇年に行った報告を補って、一九九三年四月に口頭発表した内容を会話体の形で成文化したもので、本稿と対になる研究であり、参照されたい。
- (3) 網野善彦の言う「無縁の場」。網野「無縁・公界・楽」平凡社、一九七八年、増補版一九八七年。このような研究動向に対して、村落と関連づけて批判的な発展を目指した論考として池上裕子「市場・宿場・町」(日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座第二巻、景観1「原始・古代・中世」」雄山閣出版、一九九〇年)を挙げておく。
- (4) 樋口節夫は道路から追い出されつつある現代の定期市が安住できる場として「社寺の境内」を挙げている。樋口「定期市」学生社、一九七七年、一〇〇〜一〇二ページ。
- (5) 例えば、中島義一「市場集落」古今書院、一九六四年。石原 潤「越後の定期市の現況について」(織田武雄先生退官記念事業会編『人文地理学論叢』柳原書店、一九七一年)(のちに補筆して石原「定期市の研究ー機能と構造ー」名古屋大学出版会、一九八七年に所収)。
- (6) 小林健太郎「戦国城下町の研究」大明堂、一九八五年。
- (7) 前掲、註(6)、二六六ページ。ただし、原著発表は「史林」四八一、一九六

五年。

- (8) 拙稿「安芸国沼田荘の市場と瀬戸内流通網」(『歴史地理学』一三六、一九八七年)と拙稿「岡豊」(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門II・町』東京大学出版会、一九九〇年)。ならびに前稿。
 - (9) この問題については、前稿でも市地名、市場地名も含めて指摘した。一六九ページ。
 - (10) 「長宗我部地検帳」高知県立図書館発行。
 - (11) 他にも小林が国人領主級の城下市町とされる黒岩では「市ヤシキ付」として登録された屋敷は東ノ丁にあった。
 - (12) 前稿の図5にA、B、Cなどの記号を加えて整理した。また、「市庭の諸類型と理念的発展系列」という表題を「変化系列」と訂正したが、その理由については後掲註(16)を参照のこと。
- さらに、その「変化系列」を示す破線・実線の引き方にも修正を施した。すなわち、前稿では時間的な前後関係で別のタイプへの変化がより早く出現したことが多いと考えられる場合を左側に置く方針で示した。例えば、タイプAからタイプB①への進展について見ると、時間的な前後関係ではaの方が早く、bへの変化はより遅く出現したことが多いと考えられ、bへの分岐を右側に置いた。その結果、タイプAからタイプB①bへの分岐する破線と交差することになったが、交差自体には意味はない。また、さらにその右側にタイプB①aからタイプB①bへの分岐が来る。しかし、タイプAから進展した市庭に比べて、時間的な前後関係ですべての場合についてより遅く現れるとは限らず、個別の市庭によつてはより早く常設化した場合もあったであろう。その意味で前稿の図は、個々の具体例までは説明し尽くせないような、模式的に表した図であるということになる。このような意味のない交差や説明力の不足を避けるため、本稿では破線・実線の分岐に時間的な前後関係を含意させないことにした。
- (13) 前稿、一六三ページなど。
 - (14) 前稿でも指摘した。一六三ページ。
 - (15) 例えば、小林も、戦国期の中心集落について短冊型地割を呈して市庭商業から店舗商業への過渡期にあった市町と、不規則なブロック状を呈して依然市庭商業への依存度が高いものとの二種類があったと考えられている。
 - (16) 前稿では図5の表題を「理念的発展系列」としていた。「市庭景観」として市

庭に付随する集落について見たとき、家屋が一軒もなかったタイプ A から家屋が立ち並ぶタイプ B②またはタイプ C への変化は「発展」とできると考えたからである。しかし、本文でも指摘したように「発展」は誤解を招く恐れがある。

さらに、そこが果たす中心機能を取り上げてみても、例えばタイプ A の段階の市庭がタイプ B②などと比べて低次であったと必ずしも考える必要はない。中世後期の市庭でも市町村化の如何にかかわらず、市庭商業が主流を占めていて、商人の定住を過大評価できないと吉田敏弘が指摘するように、市庭の中心機能は景観の差異にとらわれることなく考察すべきである。この意味でも、前稿の「発展」を本稿では価値評価に伴わない「変化」と訂正した。吉田「中世後期の市庭網と農村商人」近江国湖東農村を事例として「(京都大学文学部地理学教室編『空間・景観・イメージ』地人書房、一九八三年)。

- (17) 桜井英治「市庭地下人」高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅲ・人』東京大学出版会、一九九〇年、二五五ページ。

- (18) 前稿、一六二ページ。

- (19) 保立道久「市の屋形・仮屋」『日本都市史入門Ⅲ・人』(前掲、註(17)、二五六ページ)。

- (20) 高橋康夫「中世都市空間の様相と特質」高橋・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ・空間』東京大学出版会、一九八九年、七ページ。

- (21) 「大乘院寺社雑事記」文明一八年一月九日条。『増補続史料大成』第三四巻、臨川書店、一九七八年(三教書院から一九三四年に発行された「大乘院寺社雑事記」第九巻の復刻)による。

- (22) 前掲、註(20)に同じ。

- (23) 前掲、註(17)に同じ。

- (24) 前稿「一六二ページ。保立道久は市庭在家という用語に多様な形態が含まれていたと考えている。保立「市の屋形・仮屋」(前掲、註(19)、二五七ページ)。

- (25) 前稿、一五六ページ、一六八ページなど。

- (26) 新校群書類従所収本。

- (27) 鎌倉遺文第二二六三七号文書。保立道久はこの史料などを挙げながら、「市の仮屋」に初めて着目したのは原田伴彦であるが、鎌倉期の市の仮屋の史料が当時知られておらず、仮屋と市庭在家一般を区別していないので、「その仕事は新しく見直す必要がある」と指摘している。保立、前掲、註(19)、二五七ページ。

- (28) 天王寺浜市における木村布座や、近江国御座座のように市庭における座との関係から商人の住所が判明する史料は少なくないが、市舎との関わりからわかる例は珍しく、その点でこの史料は貴重である。

- (29) 本稿では清浄光寺・歓喜光寺本を主に収録した「一遍上人絵伝」(日本の絵巻第二〇巻)(中央公論社、一九七八年)に拠った。

- なお、武田佐知子「笠の山」境界をめぐる「一試論」(「一遍研究会編『一遍聖絵と中世の光景』ありな書房、一九九三年)は、御影堂本をも参照しながら、視覚的な市庭の境界として川と柵以外に市女笠に着目し、認識の問題にまで立ち入って考察しており、本稿との関係から注目される。

- (30) 酒である可能性については以前にも述べたことがある。拙稿「中世農村における市場とその取扱商品」その再検討の試み(「空間・景観・イメージ」前掲、註(16))一三三ページ。

- これに対し、黒田日出男は、低い屋根の下にも横にして置かれていることからこれを倉庫と見て、商品は酒などではなく、大甕自体であると考えているが、立っている大甕はコの位置にあり、横になったシとは離れている。筆者は両者の違いに注目したい。黒田「市の光景」(『月刊百科』二六八、一九八五年。のちに同「姿としぐさの中世史」絵図と絵巻の風景から)平凡社、一九八六年に再録、一〇六ページ)。

- (31) 「大分県史料」第一部七、所収。宇佐小山田文書第八三号文書。但し、絵図名は、第三の事例も含めて、西岡虎之助編『日本荘園絵図集成』上(東京堂出版、一九七六年)に従った。

- (32) 註(14)に同じ。

- (33) この問題については佐々木銀弥が研究史の紹介も含めて、詳細に検討している。佐々木「備前国西大寺市場の古図と書入について」(『中央大学文学部紀要』史学科三六「通巻一四〇」、一九九一年。のちに同『日本中世の都市と法』吉川弘文館、一九九四年に再録)。

- (34) 『岡山県古文書集』第三輯、所収。西大寺文書第七三号文書。

- (35) 桜井は座と解釈しているが、佐々木は「延屋」と読んでいる。桜井、前掲、註(17)。佐々木、前掲、註(33)五ページ。

- (36) このような家別賦課と座別賦課との違い、前者が常設の店舗に対する賦課と考えられることは従来から指摘されている通りである。しかし、その中でも後者

について「座別賦課をうけた商人はおおむね外来者であり、おそらく市日だけにこの市に現れて市小屋で物を売ったのであろう」と明確な見解を示したのは、桜井英治であった。さらに、後者に対する前者について「安定した需要があり、原材料も比較的入手しやすい酒屋・餅屋などの職種が、必然性をもって定住した最初の市庭住人であったかもしれない」と述べて、後者との取扱商品種の性格の違いにまで分析のメスを入れており、注目に値する。桜井「市庭地下人」(前掲、註(17)二五五・四ページ)。

(37) 前稿、一六四ページ。

(38) 保立道久は、「疎塊村の町屋と町屋の間に残り残された広場が市庭として確保された」と見ている。保立「宿と市町の景観」(『季刊自然と文化』一三、一九八六年)、二七ページ。

(39) 註(13)に同じ。

(40) この結論は現代からの類推に頼っており、中世史料との突き合わせがまだ不十分である。しかし、このような意味での広場と市庭との係わりは歴史的にかなり遡れるし、歴史を通じて見られたのではなからうか。

(41) 拙稿「流通システムからみた中世農村における市場の機能」(『人文地理』三八巻四号、一九八六年) など。

(42) 拙稿「十六世紀都市住人の活動からみた商品流通」(『日本都市史入門Ⅰ・空間』前掲、註(20)で予告し、拙稿「『多聞院日記』に現れた奈良での購買活動と流通

システム」(『奈良大学紀要』一八、一九九〇年)でも接合を試みた。しかし、本稿も含め未だ不十分である。

(43) なお、前稿で「中世の市庭における販売座席について、近代の土地割に反映するのか疑問であり、近代の土地割から復原することは困難だと考えられ」と指摘し、このような「歴史地理学的研究手法の限界性は、戦国期についても言える」として「発掘された戦国城下町として有名な一乗谷の事例で、職人などが住む町屋でも近代の土地割に反映していない場合」を挙げた(二六六ページ)。しかし、一方で国立歴史民俗博物館などによる青森県十三湊における発掘調査では近代の土地割の下から中世の土地割が出土した例が報告されている。中世から近代まで土地割パターンが変化した例と変化した例とがあるわけである。このような例を含み込んで、土地割パターンが変化する要因も今後検討する必要がある。十三湊の発掘調査については一九九三年十月に行われたシンポジウム「遺跡にさぐる北日本」およびその記録である『中世都市十三湊と安藤氏』(新人物往来社、一九九四年)における千田嘉博「十三湊・福島城の調査」などを参照のこと。

(徳島大学 総合科学部)

This paper takes up the issue of whether or not market sites in medieval Japan may be regarded as *hiroba* (public spaces). In the field of Japanese medieval history, some scholars argue that the first markets of the medieval period were held at *hiroba*. Bearing in mind this historical understanding of markets, I present my own views on the matter from the perspective of historical geography.

Professor Kobayashi Kentarō has conducted historical/geographical studies of *ichiba* (“market grounds”), but fails to consider the sites at which markets were conducted in the towns that consisted of *ichi-yashiki* and *machi-yashiki* in the Sengoku period. In terms of the issues addressed in the present joint research project, the question is whether or not these sites may be called *hiroba*.

The relationship between *ichiba* and *hiroba* is considered in a number of steps. First, a diagrammatic model (“The Forms and Conceptual Genealogy of *Ichiba* ; Fig. 1) is used to examine the types of public spaces that existed from the *ichiba* of the early medieval period, which have already been identified in studies of Japanese medieval history as *hiroba*, to the Sengoku-period *ichi-yashiki* and *machi-yashiki* as discussed in the field of historical geography. This leads to a focus on the key concept of *ichisha* (lit., “market house”) as it appears in historical documents from the early medieval period to the Sengoku period. This is followed by an examination of relevant pictorial records, which offer a more vivid image of the medieval market scene than can be gained from textual records. Using these materials and the above-mentioned model as a basis, I construct a further diagrammatic representation of the historical development of *ichiba* (Fig. 4) and develop an original theory of their relationship to *hiroba*.

The study concludes with the following thesis : As the settlements reached the stages of *machiba* (town) and *machinami* (rows of houses), markets were set up borrowing the spaces under the eaves of townspeople’s houses. The part of the street thus occupied therefore came to be distinctly recognized as *ichiba*, and may also be regarded as *hiroba*.